



TITLE:

後期アウグスティヌス思想における神と人間の関係論(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

平野, 和歌子

CITATION:

平野, 和歌子. 後期アウグスティヌス思想における神と人間の関係論. 京都大学, 2019, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21485>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	平野 和歌子
論文題目	後期アウグスティヌス思想における神と人間の関係論		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>「後期アウグスティヌス思想における神と人間の関係論」という表題を持つ本論は、後期アウグスティヌス思想における、神における関係（父と子と聖霊の関係及び神性と人性の関係）、神と人間の関係（創造、救済）、さらに神における関係と神と人間の関係の連関を考察した論文である。その考察は、三位一体論とキリスト論、原罪論と自由意志論、創造論と救済論というキリスト教思想にとって極めて重要な問題についてのアウグスティヌスの思想を、主としてアウグスティヌスの後期著作にもとづいて論じることで行われている。全五章の議論を通して、アウグスティヌスの後期思想が、神の三位一体の関係を前提として、神と人間の媒介者であるキリストを中心に構築されていることが明らかにされている。</p> <p>各章の内容は以下の通りである。</p> <p>第一章では、父・子・聖霊の本質的一性の理解が、アレイオス派との論争を通して、どのように発展しているのかを論じている。まず『三位一体論』前半部にもとづいて、アウグスティヌスとアレイオス派の対立点を確認し、アウグスティヌスがアリストテレスのカテゴリー論を応用しながら、三つのペルソナの本質的一性を論じていることを明らかにしている。続いて『マクシミヌス批判』にもとづいて、父と子の本質的一性についてのアウグスティヌスの理解が、キリスト論の射程のもとでどのような展開を遂げているかを考察している。</p> <p>第二章では、『三位一体論』後半部と『ヨハネ福音書講解説教』にもとづいて、三位一体に内在的な観点と救済史的な観点の双方において、アウグスティヌスがペルソナの相互関係を分析しながら、各ペルソナの固有性を論考していることを明らかにしている。神やペルソナによる「所有」に着目し、すべてのペルソナによる「所有（共有）」の場合でも、子が父に由来するという関係が強調されていることを指摘する。また、救済史的観点においては三つのペルソナの役割分担が明瞭だと論じている。</p> <p>第三章では、『創世記逐語註解』にもとづいて、アウグスティヌスの創造論の基本構造を明らかにしている。創造の前段階で、子（言葉）において永遠的理拠という創造計画がなされたこと、永遠的理拠にもとづき、神が、被造物の自然本性を規定する種子的理拠を造る「第一の創造」と、基本的に種子的理拠にそくして個々の被造物を存在し動くようにさせる「第二の創造」の二段階で世界を創造したことが説明されている。そして、種子的理拠にそくして被造物を存在し動くようにさせる「自然本性的・内的摂理」に加え、天使や人間などの意志的な被造物を使って被造物の外から働きか</p>			

ける「意志的・外的摂理」によって、神は、現在に至るまで「第二の創造」をし続けていると論じている。

第四章では、主に『ユリアヌス批判』『未完のユリアヌス批判』にもとづいて、アウグスティヌスが人間の「自由」をどのようなものとして捉えているのか、ペラギウス論争を通して人間の現状と救済についてどのような理解にいたったのかを考察している。人間の自由が、アダムが罪を犯す前、原罪を負った現状、将来神の国で享受できる至福の状態という人間の三つの状態にそくして考えられていることを論じている。そして、アウグスティヌスが自由を（1）拘束や強制から離れられることと（2）意志が望む行動・状態をもつことができることという二通りの意味で用いていると整理している。以上の考察を通して、アウグスティヌスは自由を人類全体の視点から考察しており、行為・能力の観点からだけでなく、状態・存在の観点から捉えていると特徴づけている。

第五章では、アレイオス派のマクシミヌスのキリスト論・救済論との対比でアウグスティヌスのキリスト論・救済論を論じている。まず、マクシミヌスが、キリスト（子）が人間的魂なしに人間的身体を受けとったと考えていること、人間の救済は人間たちがキリストの善き意志を模倣し、各人が御父との間に意志的一致を成立させることで達成できると主張していることを説明している。続いて、アウグスティヌスが、キリストが神の実体と人間的魂を兼ね備えた一つのペルソナであることを前提にして人間の救済を考えていると論じている。人間の救済はキリストが祈り（懇願）という意志的な行為を行うことによって実現され、人間たちが本性において最高に一である状態が達成されることが人間の最終的な救済であると考えられていることが明らかにされている。

(論文審査の結果の要旨)

三つのペルソナが独自性を持ちながら本質を一にするという「三位一体」、キリストが完全な神でありかつ完全な人間でもあるという「受肉」はキリスト教教義の中心的な問題である。また、神は世界をどのように創造したのか、人間の救済はいかになされるのか、救済において人間の自由意志と神の恩恵はどのような関係にあるのかといった問題は、キリスト教思想だけでなくユダヤ・イスラム教思想や西洋哲学において重大な問題として繰り返し論じられてきた。こうした問題についてのアウグスティヌスの議論は、以後の西洋での議論のあり方を規定するような多大な影響力を及ぼした。こうした問題についてのアウグスティヌスの考え方を明らかにすることは、西洋哲学の理解にとって重要かつ不可欠な研究である。

本論文は、こうした極めて重要な問題についてのアウグスティヌスの思索に正面から取り組むだけではなく、各問題についてのアウグスティヌスの議論の間の整合性と体系性を取り出そうとした労作である。そのために著者が使用しているテキストの多くは、その理解に、西洋哲学とキリスト教双方にまたがった高いレベルの知識と理解力を要求するものである。著者は、そうした困難なテキストの読解に粘り強く取り組み、独自の分析と解釈を提示することに、少なくとも部分的に成功している。

その主要な成果は、以下の三点において、従来のアウグスティヌスに対する見方に修正を迫っていることに認められる。

第一に、アウグスティヌスの三位一体論には、神の本質の一性を強調して、三つのペルソナの独自性が薄れているとの批判がある。著者は、そうした批判が『三位一体論』前半部に依拠していることに着目し、後期著作である『三位一体論』後半部と『ヨハネ福音書講解説教』の議論を詳細に検討することで、アウグスティヌスが、三つのペルソナの区別に十分な配慮をしながら神の本質の一性を主張していることを論証している。また、救済論において、父・子から発出する聖霊が主要には人間の魂の救済を担当し、父から権能を授与された子が、父に懇願することによって身体を含めた人間全体の救済を担当するという仕方で、三つのペルソナの役割分担が明確にされていることを示している。

第二に、アウグスティヌスは、人間の自由意志を低く見積もっているとの批判がある。著者は、こうした批判は、自由の担い手として「意志」という能力にのみ着目していることを指摘し、アウグスティヌスが実体（存在）と能力の一致を軸に議論をしていることを明らかにしている。

第三に、アウグスティヌスは、三位一体論とキリスト論を整合的に考察する理論的枠組をつくっていないとの批判がある。これに対して著者は、アウグスティヌスの後期思想が、神の三位一体の関係を前提として、神と人間の媒介者であるキリストを中心に構築されていることを説得的に示している。

以上の著者の議論は、アウグスティヌスは体系性を指向していなかったとする解釈に対して見直しを迫るものであり、アウグスティヌス研究に対する有意義な貢献であると評価できる。

他方で改善が望まれる点もある。第一に、先行研究への配慮が十分ではない。著者は、先行研究について言及し、批判的な考察もしているが、具体的なテキストの解釈において先行研究にどれほど負い、先行研究とどの点において異なるのかを十分に示していない。アウグスティヌス研究には膨大な蓄積があるが、著者は、本論文に關係する近年の主要な研究に知悉しており、それらの研究を踏まえた著者の解釈の獨創性を明確にすることが望まれる。

第二に、アウグスティヌスの思索全体の方向性、意図や特徴についての考察が十分ではない。アウグスティヌス自身が行っている言葉の意味の分析を著者は丁寧に整理しているが、そうした言葉の意味の分析を通してアウグスティヌスが何をやろうとしているのか、その意図の解明は十分ではない。また、第四章で整理されているような「自由」の二義性は西洋の自由論の中でどのように位置づけられるのかといった考察も望まれる。こうした考察を深めるには、アウグスティヌス以前や同時代のキリスト教思想、アウグスティヌス以降の西洋哲学についての知識が必要であり、アウグスティヌス以外にも視野を広げた今後の研鑽が期待される。ただしこれらの点は、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2019 年2 月20日、調査委員3 名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。